

令和7年度 発掘報告会

いしかわを 掘る

当日資料

国分山遺跡（遺跡遠景）

報告遺跡

- 報告1. 国分山遺跡（七尾市）
（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 報告2. 南新保ゴマジマチ遺跡（金沢市）
金沢市埋蔵文化財センター
- 報告3. 那谷寺遺跡（小松市）
小松市埋蔵文化財センター
- 報告4. 白山町遺跡（白山市）
白山市観光文化スポーツ部
- 報告5. 金沢城跡（金沢市）
石川県金沢城調査研究所

※令和7年度に行われた発掘調査成果を各自治体等の発掘担当が報告します。



国分山遺跡（方形周溝墓群と竪穴建物）

申込不要・受講無料
どなたでもお気軽に受講できます

令和
8年

3月1日（日） 石川県立図書館 だんだん広場
13:00～16:00 金沢市小立野 2-43-1 ☎076-223-9565

主 催：石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター

問合せ先：石川県埋蔵文化財センター 金沢市中戸町 18-1 普及啓発担当 ☎076-229-4477



令和7年度 発掘報告会

いしかわを掘る

開 会 13:00～

報 告 1 「七尾市 ^{こくぶやま}国分山遺跡」
13:10～ 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター 正田 悠馬

報 告 2 「金沢市 ^{みなみしんぼ}南新保ゴマジマチ遺跡」
13:40～ 金沢市埋蔵文化財センター 鏡 百恵

報 告 3 「小松市 ^{なただら}那谷寺遺跡」
14:10～ 小松市埋蔵文化財センター 川畑 謙二

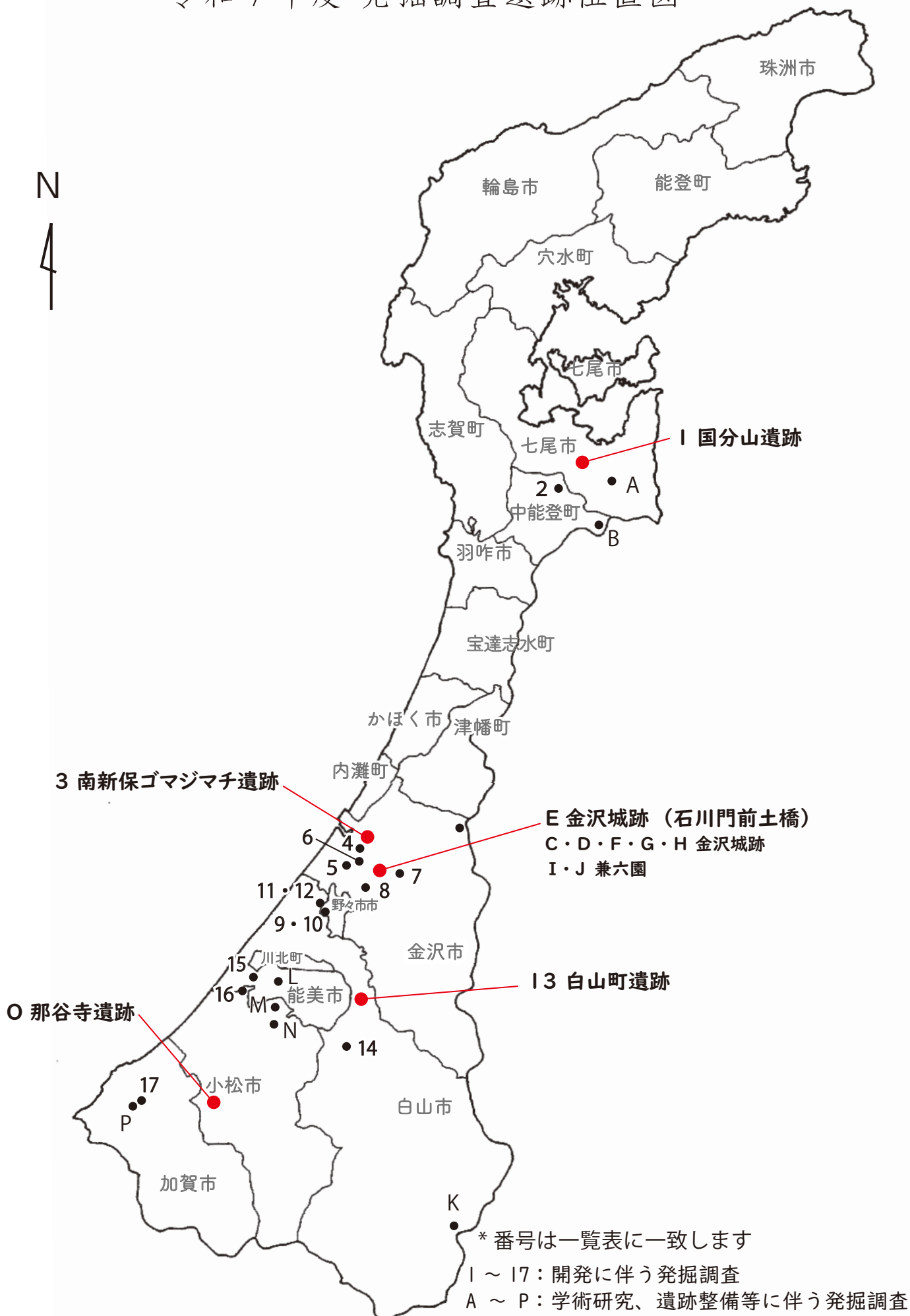
休 憩 10分 (14:40～14:50)

報 告 4 「白山市 ^{しらやままち}白山町遺跡」
14:50～ 白山市観光文化スポーツ部 中江 隆英

報 告 5 「金沢市 ^{かなざわじょうあと}金沢城跡」
15:20～ 石川県金沢城調査研究所 三原 翔吾

質 問 10分 (15:50～16:00)

令和7年度 発掘調査遺跡位置図



令和7年度 県内遺跡発掘調査一覧

(★は今回報告する遺跡)

◎開発に伴う緊急発掘調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	国分山遺跡	七尾市国分町、細口町地内		○	○			○	3,000	県
★	弥生時代後期～終末期の方形周溝墓と木棺墓、竪穴建物などを確認。埋葬施設からはガラス小玉、石製の勾玉、管玉が出土。その他、弥生土器(後期～終末期)、石器(石鏃、石錘、石斧)等が出土。									
2	廿九日ヒガシデ遺跡	中能登町廿九日地内			○	○			307	町
	大型土坑やピットが集中しており、集落の一部と考えられる。大型土坑は近隣の在江遺跡で確認されたものと規模・形態が近似する。ほかに土坑、ピットを検出し、弥生土器・土師器・須恵器・木製品が出土。									
3	南新保ゴマジマチ遺跡	金沢市大友地内		○	○				9,000	市
★	北加賀最大を含む前方後方墳2基、陸橋部をもつ方墳1基を検出。前方後方墳の周溝からは底部穿孔壺や多様な木製品が出土しており、特に北陸初かつ国内最古の事例となる笠形木製品が6点出土。									
4	南新保C遺跡	金沢市南新保町地内		○	○	○			4,600	市
	弥生時代中期～古墳時代前期の平地式建物2棟、柱穴、土坑、溝を検出。調査区北西側では、幅25mの溝群が45mにわたって検出され、弥生時代中期～古墳時代前期の土器が出土。									
5	出雲じいさまだ遺跡	金沢市戸板地内		○	○			○	195	市
	戸板小学校の増築に伴う発掘調査。弥生・古墳時代の土坑と近世の用水を検出。遺物は土器の細片が主で、これまでの調査で見つかった玉作り関連の遺構・遺物は見られなかった。									
6	駅西本町Ⅰ丁目遺跡	金沢市駅西本町地内		○					495	市
	弥生時代後期～終末期の集落遺跡。平地式建物Ⅰ棟と掘立柱建物Ⅰ棟、柱穴、溝、河跡が検出され、河跡から弥生土器のほか、槽や階段などの木製品が出土。									
7	材木町遺跡（Ⅰ3番地点）	金沢市材木町地内						○	2,658	市
	材木小学校跡地の整備に伴い道路築造部分及び防火水槽埋設部分を調査。石組井戸や小道跡を検出。近世陶磁器や土器、木製品などが出土。									
8	金沢城下町遺跡（西外惣構跡香林坊2丁目12番地点）	金沢市香林坊地内						○	100	市
	西外惣構の堀跡を検出。現在の水路東岸天端から約2.9mの箇所では落ち込みを確認。調査は堀底まで達していない。速報値だが、土居基底部幅約9.8m、堀幅約9.6m前後と推定。									
9	末松遺跡	野々市市末松、中林地内	○		○	○	○		1,430	県
	縄文時代、古代、中世の遺構と遺物を確認。多数の小穴のほか、末松廃寺の創建時期に近い、7世紀の須恵器が土坑から出土。									
10	末松遺跡	野々市市中林地内	○	○	○	○	○		1,169	市
	古代及び中世の集落を確認。古代の竪穴建物3基、古代・中世ともに掘立柱建物と考えられる柱穴列を検出。									
11	福正寺タカダ遺跡	白山市福正寺町地内		○	○	○			441	市
	竪穴式住居を検出。遺物として古代の須恵器を確認。									

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
12	末松ダイカン遺跡	白山市木津町地内		○	○	○			42	市
	遺構としては旧河川を確認。遺物として土師器と須恵器を確認。									
13	白山町遺跡	白山市白山町地内	○				○		830	市
★	道路状遺構を検出。遺物としては、縄文土器、カワラケ等が出土。									
14	上野B遺跡	白山市上野町地内	○						200	市
	包含層の一部を調査。									
15	中ノ庄遺跡	能美市五間堂町地内		○	○	○	○		495	市
	掘立柱建物・溝・土坑・小穴を確認。弥生土器・土師器・須恵器・石製品・木製品が出土。									
16	中ノ江遺跡	小松市高堂町、 能美市中ノ江町地内		○	○				500	県
	弥生時代後期～古墳時代の掘立柱建物、平地式建物、井戸、溝、土坑、小穴を確認。弥生土器や土師器、石斧、緑色凝灰岩の剥片、柱根等が出土。									
17	大聖寺城下町遺跡	加賀市大聖寺永町地内						○	620	県
	大聖寺城下町遺跡南東端の北国街道に面した場所を調査。江戸時代後期（18世紀後半）に川沿いの土地を大規模に造成し、町屋としている。陶磁器や土師器皿、石製品等が出土。									

【調査担当】市・町・市・町教育委員会等 県：県埋蔵文化財センター

◎学術研究、遺跡整備等に伴う発掘調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
A	七尾城跡	七尾市古屋敷町地内					○		21	市
	九尺石北西の崩落斜面を発掘調査、深さ2m以上の盛土を検出。盛土の土中に中世土師器が含まれており、16世紀代の年代を想定。また、トレンチ上層の崩落土からは、中世土師器のほか、国産天目茶碗の破片などが出土。									
B	石動山	中能登町石動山						○	8	町
	石垣背面調査により、復元前の石垣栗石層を確認した。瓦（近代以降か）や白磁片が出土。									
C	金沢城跡（本丸北）	金沢市丸の内						近代	30	城
	本丸北石垣の解体調査を実施。解体範囲は、近代に旧陸軍が煉瓦トンネルを構築した際に改変し、令和6年能登半島地震により崩落した変形部分。今年度は、石材34石を解体。									
D	金沢城跡（本丸南）	金沢市丸の内						近代	164	城
	本丸南側に付設された近代階段で、崩落石材回収・石垣解体調査・上部解体範囲の調査を実施。今年度は崩落石材146石、解体石材60石を回収・調査。									
E	金沢城跡（石川門前土橋）	金沢市丸の内						○	70	城
★	石川門前土橋北面の石垣解体調査と上面遺構調査を実施。土橋路盤面などを確認。解体した石垣は、幕末から明治時代にかけて積み直されたと推定でき、近世中期に改修された栗石層も確認。今年度は石材145石を解体調査。									

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
F	金沢城跡（御居間先下）	金沢市丸の内						○	140	城
	御居間先下石垣の解体調査に先行し、上面遺構調査を実施。近世後期の太鼓塀等の控柱抜き取り痕跡や塚の区画である熨斗立ての基礎等を確認。また、地表面では見られなかった地震による亀裂を新たに確認。									
G	金沢城跡（玉泉院丸南）	金沢市丸の内						○	90	城
	玉泉院丸南側の堀（現況は園地）に南面する石垣の解体調査と上面遺構調査を実施。調査範囲の大半は、昭和40年代の石垣改修により改変を受けていたが、一部に近世期の盛土が残存することを確認。今年度は、石材49石を解体調査。									
H	金沢城跡（玉泉院丸南西）	金沢市丸の内						○	170	城
	玉泉院丸南西隅に位置する石垣で、解体調査を実施。令和6年度の上半部に続き、今年度は、下半部石材151石を対象。									
I	兼六園（栄螺山）	金沢市兼六町						○	100	城
	霞が池の南に位置する栄螺山では、石材152石を解体調査。									
J	兼六園（辰巳用水）	金沢市兼六町						○	160	城
	霞が池の北側斜面に位置する、辰巳用水を埋設した石畳状石垣で、崩落石材81石を回収・調査。									
K	大汝峰遺跡	白山市白峰地内				○	○	○	2	市
	経塚を調査し経筒が出土。									
L	西山古墳群	能美市徳久町			○				12	市
	古墳の墳丘盛土、周溝を確認。土師器が出土。									
M	河田山9号墳	小松市国分台地内			○				16	大学
	古墳北東隅においてトレンチ調査を実施し、1980年代の調査で確認していた北側周溝の続きとみられる土の堆積を確認。一方、これに続く東側周溝は判然としなかった。									
N	南野台遺跡	小松市古府町地内	○	○	○	○	○		16	市
	加賀国府・国分寺関連遺跡確認調査。古代の礫敷遺構の広がり及び、その上面の整地層を確認。									
O	那谷寺遺跡	小松市那谷町地内					○		145	市
★	中世以前における那谷寺の実態解明に向けた確認調査で、昨年度に続き旧明王院と伝わる地区を調査。新たな礎石建物が確認され、15～16世紀の土師器皿や陶磁器、金属器、石製品などが出土。									
P	大聖寺藩邸跡	加賀市大聖寺八間道地内						○	68	市
	園池付近で過去の導水施設（陸部からの排水設備）の可能性のある石製品を検出。現在の陸部が、近代に大きく盛り土されていることを確認。									

【調査担当】市：市教育委員会等 城：県金沢城調査研究所 大学：金沢学院大学

こくぶやま
国分山遺跡

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

正田 悠馬

所在地 七尾市国分町地内

調査原因 一般国道 470 号 田鶴浜七尾道路

調査期間 令和7年6月6日～12月25日

調査面積 3,000 m²

主な遺構 方形周溝墓、木棺墓、竪穴建物

掘立柱建物、土坑、製炭遺構

主な遺物 弥生土器、須恵器、石器

勾玉、管玉、ガラス小玉



1. はじめに —位置と環境—

国分山遺跡の位置 (S=1/25,000)

(1) 遺跡の位置

国分山遺跡は、JR七尾駅から南西2.1km 先にあり、標高32mを測る低丘陵上に立地する遺跡です。丘陵の東側には能登国分寺跡、さらに七尾城跡を臨みます。



国分山遺跡とその周辺（南から）

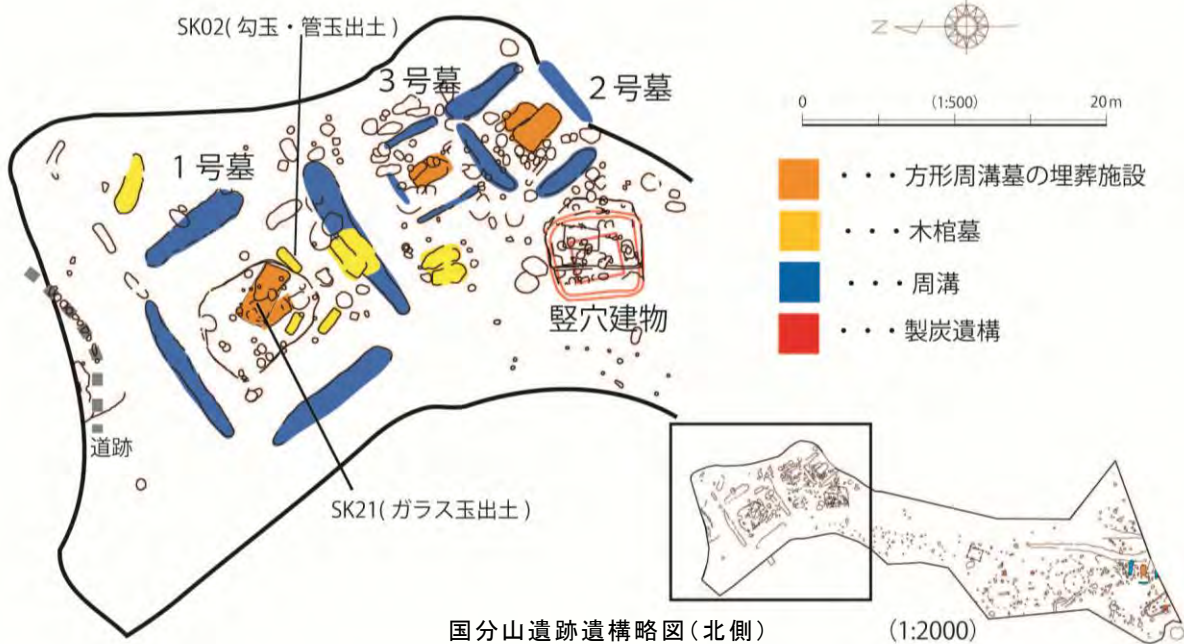
(2) 周辺の遺跡

国分山遺跡が所在する南北に連なる丘陵上には、弥生時代の墓である方形周溝墓群と中世の木棺墓群を確認した細口源田山遺跡や、古墳時代初め頃の前方向後方墳が2基並んだ国分尼塚古墳群など、多くの墓が確認されていることから、一帯の丘陵上は弥生時代から中世にかけての墓域であったことが分かっていました。

このような周辺環境から、国分山遺跡も古墳などお墓の存在が想定されていました。

2. 調査の成果

今年度は調査対象範囲の北半分を調査し、北側で弥生時代後期から造られた方形周溝墓や木棺墓と呼ばれるお墓が集中して見つかり、それに隣接する竪穴建物を確認しました。



(1) 方形周溝墓と木棺墓

北陸では弥生時代中期以降、人を埋葬した穴の周りに溝(周溝)を掘って区画する「周溝墓」と呼ばれるお墓が現れます。周溝を四角く掘った「方形周溝墓」と呼び、今回は周溝の四隅が切れた方形周溝墓を4基確認しました。うち3基は南北に連なります。

埋葬施設は規模が総じて大きく深い特徴があり、1号墓の中心埋葬施設(SK21)の規模は長さ3.8mと長大で、亡くなった人を納めた木棺の周囲を板材で囲った「木槨墓」と呼ばれる埋葬施設であることがわかりました。木槨墓は、弥生時代中期から終末期にかけての九州や山陰など日本海側に散見され、北陸では希少です。2号墓の埋葬施設も木槨構造の可能性があります。国分山遺跡に葬られた人には、山陰など日本海側の地域と交流した人物がいたと推測できます。埋葬施設の形態と出土した土器から、弥生時代後期から終末期にかけて造られたと考えられます。

SK21からは、副葬品と考えられるガラス小玉約60点と石製の赤い管玉2点が広く散らばって出土しました。ガラスは弥生時代の日本で作られておらず、インドなど大陸で生産されたものが半島を通じて日本列島へ運ばれていました。赤い管玉の素材は、佐渡島で採取される鉄石英(通称:赤玉石)と考えられ、当時の交流網の広さを感じさせます。

その他に、1号墓の内外には木棺墓が8基確認されました。木棺墓は地面に穴を掘り、その

中に木棺を置く埋葬施設です。今回確認した木棺は、短辺の板材を地面に掘った溝に固定し、長辺の板を据える形態で、現代の持ち運ぶ棺とは異なります。

SK21の南側に隣接する木棺墓(SK02)からは、石製の^{まがたま}勾玉3点と管玉20点が出土しました。頭側と想定される場所からまとまって出土したことから、装身具として亡くなった人が身にまとっていたと考えられます。^{みそきがわ}御祓川を挟んだ東側の対岸には、玉製品を製作した^{ちの}千野遺跡があり、SK02から出土した玉類は周辺の遺跡で製作された可能性があります。



1号墓の中心埋葬施設(SK21)



1号墓内の木棺墓(SK02)



1号墓(SK21)から出土したガラス小玉・管玉



木棺墓(SK02)から出土した勾玉・管玉

(2) 竪穴建物

2号墓の西側からは、竪穴建物(SIO1)を確認しました。地面を四角く掘りくぼめた形で、およそ6.5m四方の規模を測ります。4本の柱を持ち、その真ん中には煮炊きなどを行った炉跡、南側には直径60cm、深さ約80cmの貯蔵穴^{ちようそうけつ}とみられる土坑がありました。北側にも大型の土坑があり、貯蔵穴が掘り直された可能性があります。出土した土器の特徴から、弥生時代終末期頃に利用されたと考えられます。そのため、方形周溝墓が築かれた時期に、あるいはその直後に竪穴建物が建っていた可能性があります。

お墓を築いた時期と近い時期に、お墓と隣接して建物を建てる事例は少なく、今回は1棟のみ単独で確認されたことから、亡くなった人を一定期間安置する^{もがい}殯屋や何らかの特別な施設であった可能性も考えられます。

(3) その他の遺構

方形周溝墓が多く確認された部分より南側には小さな穴が多く見つかり、掘立柱建物^{ほったてばしらたてもの}1棟を構成する柱穴や、円形に巡る小穴も確認されました。

壁が赤く焼け多量の炭が確認された土坑も見つかり、炭を作った製炭遺構であると想定されます。これらの遺構は時期不明ですが、弥生土器のほか^{すえき}に古代の須恵器や中世の青磁片^{せいじ}などが出土し、長きに渡って丘陵が利用されていました。

調査前の段階から丘陵を南北に縦断する土塁^{どるい}が確認でき、シカなど野生動物の侵入を防ぐシシ垣などとの関連が想定できます。



弥生時代後期～終末期の竪穴建物 (SI01)

4. まとめ――

今回の調査では、弥生時代後期から終末期にかけての方形周溝墓群や木棺墓群、竪穴建物を主に確認しました。その他に時期不明の掘立柱建物や製炭遺構なども確認し、国分山遺跡が所在する丘陵は長きに渡って利用されたことがわかりました。来年度調査予定の付近でさらに1基の方形周溝墓を確認したことから、南側にも墓域が広がることが予想されます。



竪穴建物から出土した弥生土器



埋葬施設から出土した玉類

南新保ゴマジマチ遺跡

金沢市埋蔵文化財センター

鏡 百恵

所在地 金沢市大友地内

調査原因 土地区画整理事業

調査期間 令和6年10月11日～令和7年8月4日

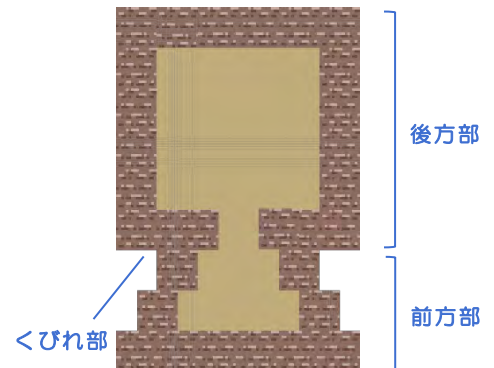
調査面積 約 8,750 m²

主な遺構 弥生時代：方形周溝墓、布掘建物、
掘立柱建物、土坑、小穴、溝、

古墳時代：前方後方墳、陸橋をもつ方墳

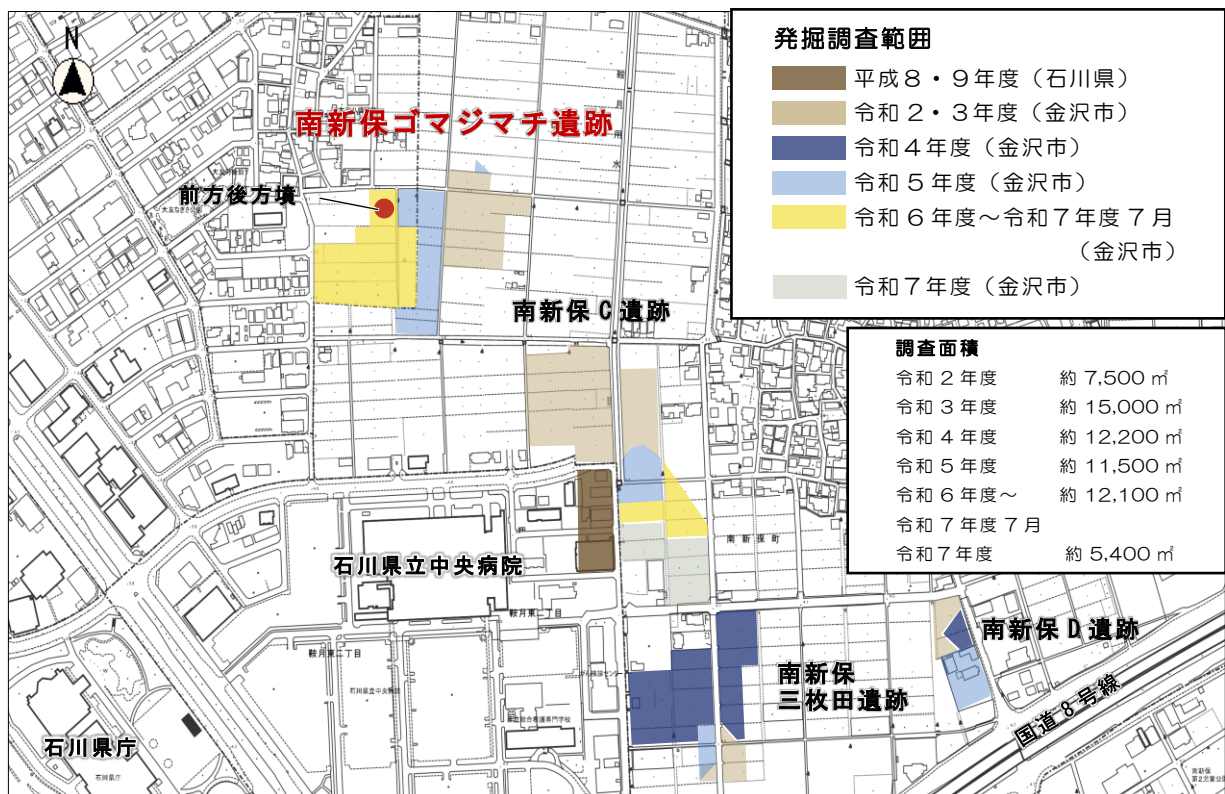
主な遺物 弥生時代：弥生土器、木製品、石製品、玉製品

古墳時代：土師器、木製品、石製品



1 立地と周辺環境

南新保遺跡群は金沢平野の北西部、金沢港までは約 2 kmの臨海部に位置しています。現在は水田や果樹園が広がる田園風景ですが、かつては沼が広がり小川が網目状に流れる低湿地であり、その中の微高地上に複数の遺跡が点在しています。周辺には南新保A～E遺跡、南新保三枚田遺跡のほか、弥生時代の大集落である西念・南新保遺跡等が分布しています。



2 過去の調査

南新保ゴマジマチ遺跡は令和3・5年度に金沢市が発掘調査を行っています。過年度調査で検出された遺構はそのほとんどが溝であり、出土遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものが大半で、これ以外には奈良・平安時代の須恵器、中世の陶磁器、土師器皿が出土しています。中世の遺構としては、15～16世紀の火葬土坑墓がみつかっています。

3 今回の発掘調査

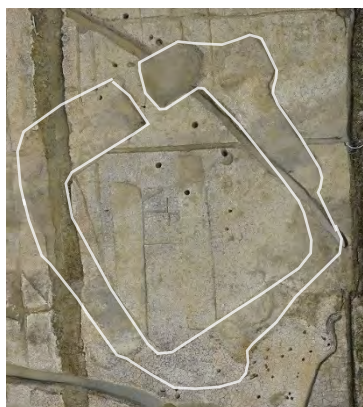
特に古墳時代前期の方墳1基と前方後方墳2基の計3基の古墳が検出されました。



1号墳 陸橋部をもつ方墳



- 規模 墳丘規模: 約 11.7m / 周溝幅: 約 1.5~3.2m / 周溝深: 約 0.10~0.55m
年代 古墳時代前期
特徴 今回報告の中で最も古い / 周溝から時期を示す土器が出土 / 墳丘は消失
方墳から前方後方墳への過渡的な方墳



1号墳 航空写真

周溝は外側が弧状に張り出し、幅が一定ではありません。北側周溝に造られた陸橋は、中央から少し東側にずれて設けられており、幅は 0.7~0.9m と狭いですが、陸橋部周囲の周溝は幅広で深く掘削されていることから、陸橋を意識して造っているのは明らかです。

出土遺物は非常に少ないですが、特に口縁部に竹管文、肩部に矢羽根状の文様をもつ二重口縁壺が出土しており、3基の中で最も古い時期を示しています。



2号墳 北加賀最大の前方後方墳



- 規模 墳丘規模: 約 34.0m / 周溝幅: 約 2.7~8.0m / 周溝深: 約 0.45~0.65m
年代 古墳時代前期
特徴 周溝から古墳祭祀を示す土器や木製品が多数出土 / 墳丘は消失
笠形木製品が5点出土

周溝は墳丘周囲に墳形と相似形にめぐりますが、後方部北西の隅角のみ外側に突出します。周溝の幅は後方部に比べて前方部が狭く、南溝よりも北溝が広がっています。周溝くびれ部の墳丘側からは、底部に穴を開けた古墳時代前期の壺が出土しました。底部に穴を開けた土器は方形周溝墓や古墳から出土することが多く、葬送儀礼の中で供献されたものと考えられています。土器は周溝の底から約 15 cm の覆土中で出土してお



2号墳と3号墳 航空写真

り、墳丘部に置かれたものが転落したと考えられます。また、周溝からは多様な木製品が出土しており、特に板状木製品は前方部周溝から集中して出土しています。古墳祭祀具と考えられる笠形木製品は後方部及び前方部周溝より計5点出土しており、墳丘周囲に配置されていたと考えられます。なお、後方部南溝の外側では杭が地面に刺さった状態で確認されましたが、笠形木製品の付近で出土した支柱の可能性のある杭状木製品とは木取りなどが異なることから、笠形木製品の支柱となるかは不明です。



3号墳 並列する前方後方墳



規 模	墳丘規模：約 33.3m／周溝幅：約 2.5～6.5m／周溝深：約 0.15～0.35m
年 代	古墳時代前期
特 徴	2号墳と並列／1号墳より新しく2号墳よりも古い／墳丘は消失 周溝から土器や木製品が出土／ <u>笠形木製品が1点出土</u>



3号墳 完掘状況

2号墳の後方部北溝から約2mの間隔をあけて並列し、墳形及び規模についても2号墳とほぼ同様です。同形・同規模・同軸の前方後方墳が並列する例はほとんどなく、非常に珍しい事例といえます。おそらく時期的に近接すると考えられますが、2号墳より前方部周溝が非常に浅く、不明瞭であることから、古い時期の特徴が見いだされます。前方部周溝の深さは 0.15 mで、墳丘側は直立気味に立ち上がるものの、外側の立ち上がりは非常に緩やかで肩部は不明瞭です。2号墳同様周溝からは多数の木製品が出土していますが、

特に笠形木製品1点が後方部から出土しています。また、くびれ部周溝からは、建材や柵かと思われる別材を組み合わせた木製品が出土しており、墳丘上での使用が想定されます。



笠形木製品が出土



数 量	6点
出土地点	2号墳：A・C（後方部南溝）、B（前方部北溝）、D（後方部北溝） E（くびれ部北溝） 3号墳：F（後方部南溝）



笠形木製品 名称	法量 (mm)			裏面穴 (mm)		
	長径	短径	高	長	幅	奥行
A	475	440	180	(120)	140	120
B	(335) 《420》	370	160	100	70	95
C	(320)	375	140	110	105	80
D	(400)	(285)	(100)	120	115	70
E	(130)	327	115			
F	320	270	(125)	90	(25)	120

※()は残存長、《 》は復元長を示す。

出土笠形木製品の法量

残り具合の良い A や B は、外面半球状、裏面は平坦で中央に方形の穴があげられ、外面にも複数の穴があいていることが確認できます。

A は外面に 85 mm × 40 mm の円形の穴が 2 箇所あり、復元すると 4 ～ 5 つの穴があいていた可能性があります。B は側部下端で面取りをしている可能性があります。外面に 70 mm × 60 mm の円形の穴が 2 箇所、57 mm × 20 mm の長方形の穴が 1 箇所あけられています。円形の穴は対になる位置にあり、2 つの穴が内部でつながっていた可能性があります。長方形の穴は貫通していません。F は、側部下端は面取りをしている可能性があり、小ぶりの製品です。



類似品として、畿内（現在の近畿中央部）を中心とした古墳時代中期～後期の古墳から出土する「笠形木製品」があります。「蓋^{きぬがさ}（貴人に差し掛ける長柄の笠）」を模した木製品で、円盤状の笠部と杭状の支柱からなり、古墳の周囲を取り巻くように立てられていた姿が復元されています。畿内を中心に出土する「笠形木製品」は、古墳専用材であるコウヤマキが用いられることから、王権中枢との結びつきを示す考えられています。古い段階の「笠形木製品」は大きく隆起する半球状に近い形状で、側部垂直面の襷表現、裏面の円形割り込み、貫通する中央孔など、モデルである「蓋」を忠実に再現しています。一方で時代が下ると平面形態が楕円形のものや側面形態が扁平になるものが多くなり、側部の襷表現も省略され、裏面の割りが方形になるなど、デフォルメ化が進むようになります。

今回出土した笠形木製品は、畿内周辺出土の「笠形木製品」よりも古い古墳時代前期のものであり、畿内周辺出土品とは細部が異なることから、異なる系譜であることが予想されます。しかし、外面の損傷具合が裏面よりも強くみられることから、外面が風雨や日光に長時間繰り返しさらされる環境、つまり前方後方墳に一定期間たてられていた使用状況が想定されます。また、周溝からは支柱となるような杭状木製品も複数出土していることから、畿内周辺出土の「笠形木製品」と同様の使用状況、つまり墳丘にたてる古墳祭祀が行われていたものと考えられます。

新たな発見－前方後方墳で行われた古墳祭祀－

① 笠形木製品－前方後方墳からは初出土－

前方後方墳からの出土は国内初の事例であり、木製品を前方後方墳にたてる古墳祭祀が行われていたことが明らかとなった国内最古の事例です。これまで考えられていた前方後方墳の祭祀形態に一石を投じる貴重な新発見であるといえます。北陸初の出土でもあります。

なお、古墳時代中期～後期に畿内周辺で出土する「笠形木製品」とは系譜が異なりますが、古墳にたてて使用した状況は類似していると考えられ、その時期は畿内よりも古いといえます。

② 北加賀最大の前方後方墳など、3基の古墳の発見

古墳の大きさは地域勢力の規模や地域における有力者の力の大きさを表すと考えられています。北加賀最大の前方後方墳の存在は古墳時代前期に地域の有力者が本遺跡周辺に存在していたことを示すものです。また、時期的変遷のある古墳の発見は、複数世代にわたって勢力が継続した状況を示します。古墳時代前期の北加賀地域における勢力関係の一端が明らかとなりました。



南新保ゴマジマチ遺跡 遺構全体図

南新保ゴマジマチ遺跡
前方後方墳出土品



建材か 柵か



壺



笠形木製品 (F)



左上: 大型壺 左下: 笠形 (B) 右: 板状木製品



左上: 鋤 左下: 板状木製品 右上: 底部穿孔壺



板状木製品と両端にほぞのある方形木製品



孔のある板状木製品



樹立する杭状木製品 (芯持ち材)



笠形木製品 (A)



杭状木製品 (割材)



笠形木製品 (A)



樹立する棒状木製品 断面図

那谷寺遺跡

小松市埋蔵文化財センター

川畑 謙二

所在地 小松市那谷町地内

調査原因 那谷寺遺跡確認調査

調査期間 令和7年10月14日～同年12月18日

調査面積 145 m²

主な遺構 礎石建物、集石、土坑、水源地、溝、焼結面 など

主な遺物 土器、陶磁器、金属製品、石製品 など

1 はじめに

現在の那谷寺は、松尾芭蕉が『奥の細道』の紀行で句を詠んだ名勝指定の奇石を中心に、江戸時代に前田利常により再興された伽藍が伝わります。

一方で、那谷寺は養老元年(717)開創の縁起を持ち、中世に白山信仰の「三ヶ寺」として勢力を拡大し、真言系修験や白山峰行の拠点となるなど中世寺院としての歴史がありました。加えて、平安時代末頃に成立した白山中宮の末寺のなかで、唯一現代まで法灯を継いできた寺院として特別な存在といえます。

しかし、戦国時代の争乱のなかで荒廃したことで、中世文書が失われ、中世の堂舎は遺跡となり、中世寺院としての実態は不明瞭なままです。

そこで小松市では、那谷寺の文化財総合調査に合わせ、中世那谷寺の実態の把握を目的に、令和6年度より遺跡調査を開始しました。



遺跡の位置(S=1/25000)



現在の境内(奇石・本堂)

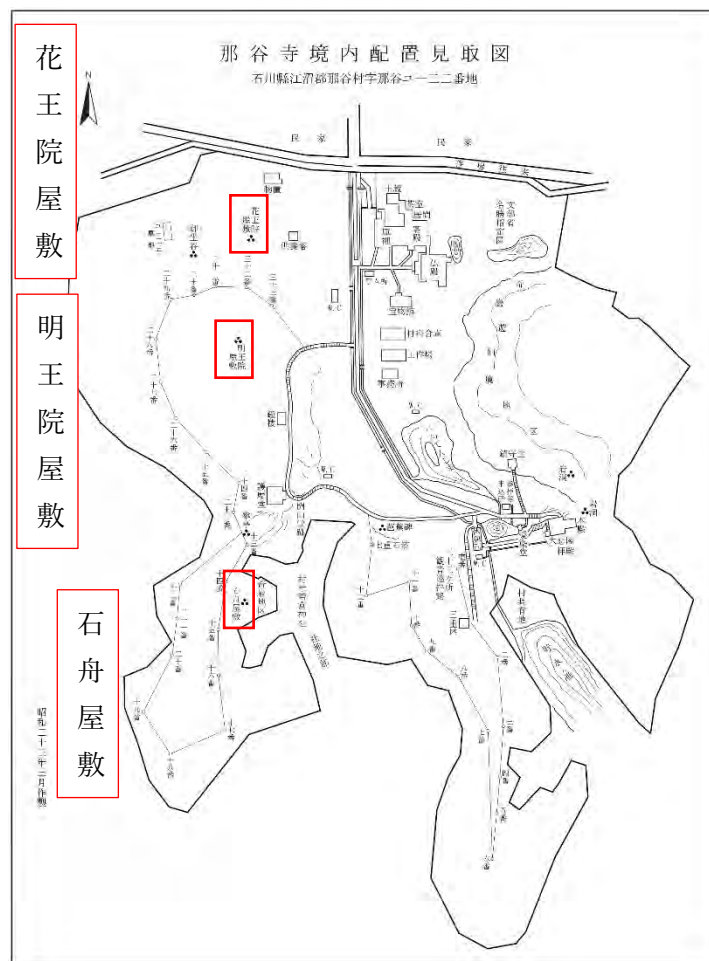
2 中世那谷寺の歴史と調査

(1) 中世那谷寺の歴史

那谷寺は、長寛元年(1163)頃に成立した『白山記』に「三ヶ寺」として登場し、「岩屋寺」と号していたことがみえます。その頃は、白山本宮(白山寺)と同じく那谷寺も天台宗であったと考えられます。南北朝の内乱で北朝側に味方したことで、南朝側についた中宮八院を従え、

勢力を拡大していきました。その後、南北朝期に、醍醐寺金剛王院流の真言密教の影響を受けるようになり、長享2年(1488)と明応6年(1497)に金剛王院門跡が下向するなど、その関係が強化されていったようです。また、大永5年(1525)に豊前国彦山靈山寺の僧が那谷寺に逗留し、白山に登拝するとともに靈山寺の秘伝書を伝授するなど、16世紀には白山入峰行の拠点でもありました。

その一方で、当時加賀は一向一揆の体制下にありました。ただし、天文5年(1536)に大内義隆が大坂本願寺に那谷観音堂下の瑪瑙を求め、証如が手配を指示した史料から、那谷寺が江沼郡の東組に属していたものの、要求どおりには動かなかったことがみえます。しかし、弘治元年(1555)の越前朝倉氏の南加賀侵攻で那谷寺は焼き討ちに合い、戦乱が続くなかで天正期には荒廃していたようです。



昭和23年製作の境内見取図(清書加筆)

(2) 史料からみえる境内の変遷

中世那谷寺は、独立した坊や院の集合体と考えられ、少なくとも6つの存在が確認されています。おそらく、それぞれの坊や院が本泉坊領の額田荘得丸名のように所領を持ち、活動していたと考えられます。江戸時代に那谷寺が再興した後は、華王院のみが存続し、新たに成立した不動院が本坊となりました。明治5年(1872)に華王院が廃止になり、現在へといたります。

年(旧暦)	坊院名	出典
観応2年(1351)	歓喜院	醍醐寺文書
文安3年(1446)か	華王院	壺囊鈔
寛正4年(1463)	福蔵坊	政所内評定記録
文明4年(1472)	本泉坊	中院家文書
大永8年(1528)	宝光院	実隆公記
永禄2年(1559)	明王院	加賀江沼志稿 (二次史料)

史料にみえる中世那谷寺の坊院(初見)

(3) 那谷寺遺跡の資料調査および踏査

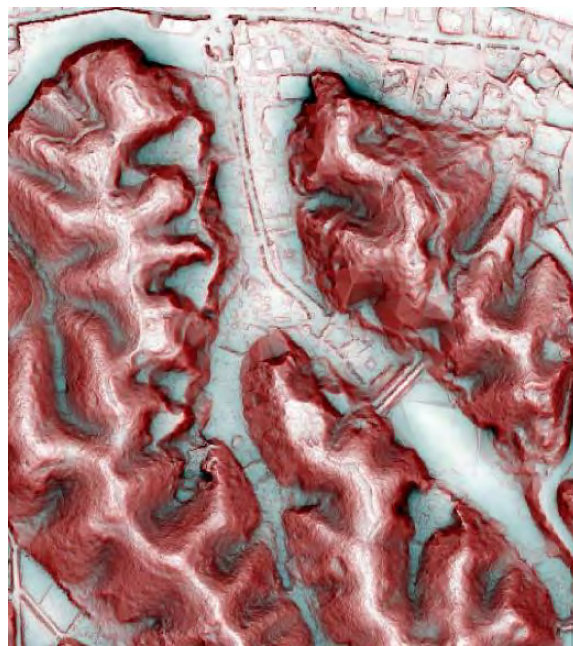
現在の那谷寺は、南北に延びる東西の尾根に堂舎を配置し、境内を形成しています。東側尾根には、奇石が中心にあり、その奥に本堂、頂上は要害である那谷城跡と伝わります。西側尾根には斜面中腹に鐘楼・護摩堂、谷が左右に分岐する地点から延びる中央尾根東斜面に三重塔を配置しています。これまで、昭和57年の堤造成時に緊急調査が行われ、また、堤の底や近接地から遺物が採取されていました。

調査開始にあたり、境内全域を対象に踏査を実施しています。その結果、西側尾根を中心

に大小多数の平坦面が展開することが確認され、史料調査で判明した中世の坊や院の跡地と想定されました。西尾根の平坦面は、東斜面に配置され、その多くが奥に一段高い小平坦面を持つという同じ特徴が認められました。

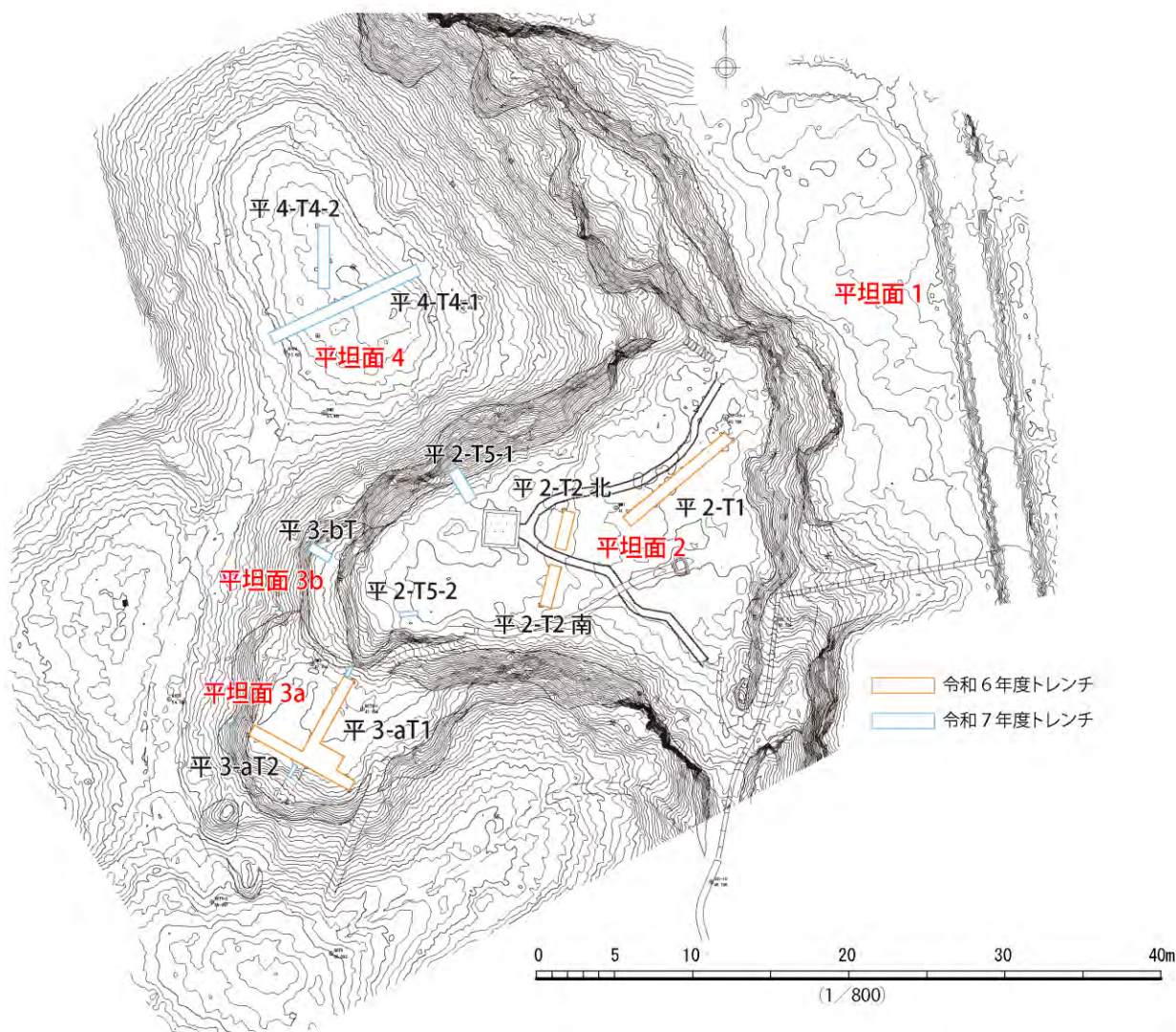
3 調査で発見された主な成果

調査は、明治時代まで華王院が存在し、昭和 23 年境内図記載の「明王院屋敷」と推定される区域より開始しました。調査区は、谷部分の平坦面1から丘陵頂部の平坦面4までの大小4つの平坦面から構成されます。平坦面1は、旧華王院の敷地の一部、平坦面2～3が旧明王院の跡地ではないかと考えています。



那谷寺の赤色立体図

地理院タイル・Q 地図タイル(林野庁・国土地理院)



那谷寺遺跡 令和6・7年度調査区測量図(図縮尺1/800)

平坦面1

絵図調査から、建物があつた大部分は現在の駐車場造成時に失われたと判断されたため、トレンチ調査は行いませんでした

平坦面2

T2-北・南約では 50 cm下に中世の面があり、火災の痕跡(写真①・②)が確認されています。T2-南の端部で玉髓を含む礫や炭化物で埋まった土坑(写真③)が、T1 でも瑪瑙や玉髓を含む集石箇所(写真④)が検出されています。また、集石に連続する落ち込み部分では、底の炭化物層から越前焼甕1個体が潰れた状態(写真⑤)で検出されました。なお、T1 の礫中には、花崗岩といった加賀地域以外から持ち込まれた石材も含まれていました。T5-1では、斜面に据えられた礎石や方形に掘り込まれた岩盤(写真⑥)が確認され、斜面際に礎石建物跡が存在することが判明しました。T5-2 では、岩盤からの湧水と旧表土と考えられる黒色土層(写真⑦)が確認され、水源地とみられます。

以上、平坦面2では、敷地奥に水源地があり、その前面に礎石建物等から構成される建物群が配置されていたと考えられます。

遺物は、15 世紀～16 世紀代の年代を示す青磁碗や瓶の破片のほか、信楽焼の壺片、瓦質土器の風炉か火鉢の破片、銅銭などが出土しています。

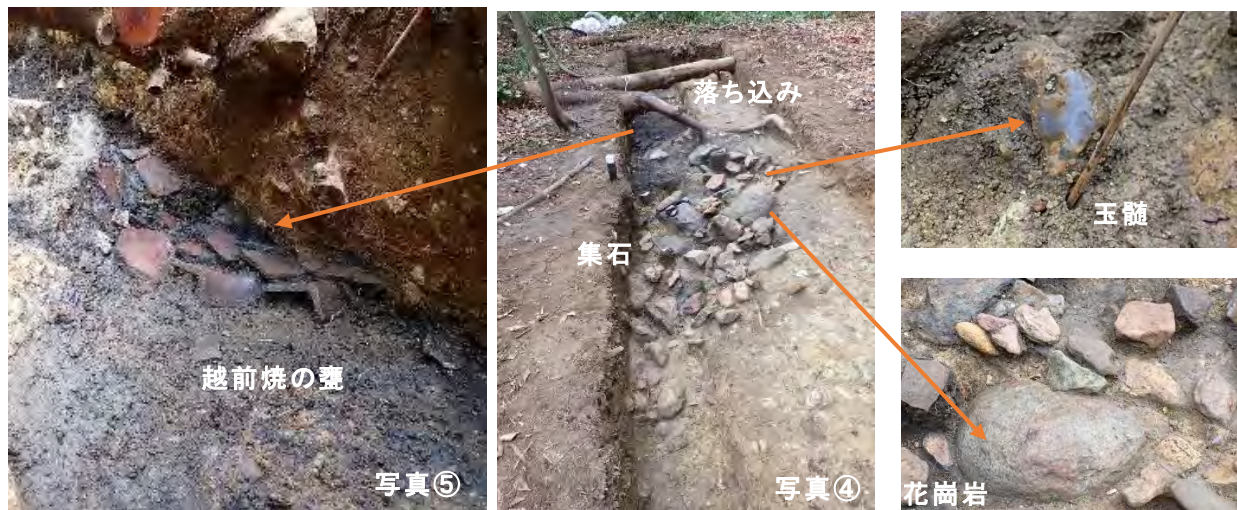
なお、中世面の上に、軟礫を含む層(写真②ほか)が平坦面全体に確認され、斜面を削った土によるかさ上げ整地が行われたと考えられます。造成時期については、いぶし瓦片の出土から近世以降か、15 世紀代の青磁片から、火災後あまり間を空けずに埋めてしまった可能性も考えられ、今後の検討が必要です。



平坦面2 T2-北



平坦面2 T2-南



平坦面2 T1



平坦面2 T5—1

平坦面2 T5—2

平坦面3a

平坦面は、斜面を削った土を前面に盛土する方法で造成されており、奥側に礎石建物(写真⑧)が検出されました。礎石は、上下2面に重なって検出され、少なくとも2回以上同じ場所で建て替えられています。建物南西側で確認された焼土の塊は建物の土壁(写真⑨)とみられ、建物が火災にあったと考えられます。さらに、建物と主軸が揃う前面(北)側の石列と、側面(西)側の溝は、敷地区画を示す可能性があります。建物背面は、崖面ではなく一段高い面が確認され、空間が確認されています。おそらく北方向を建物正面とすると想定されることから、仏堂ではない可能性が指摘されています。

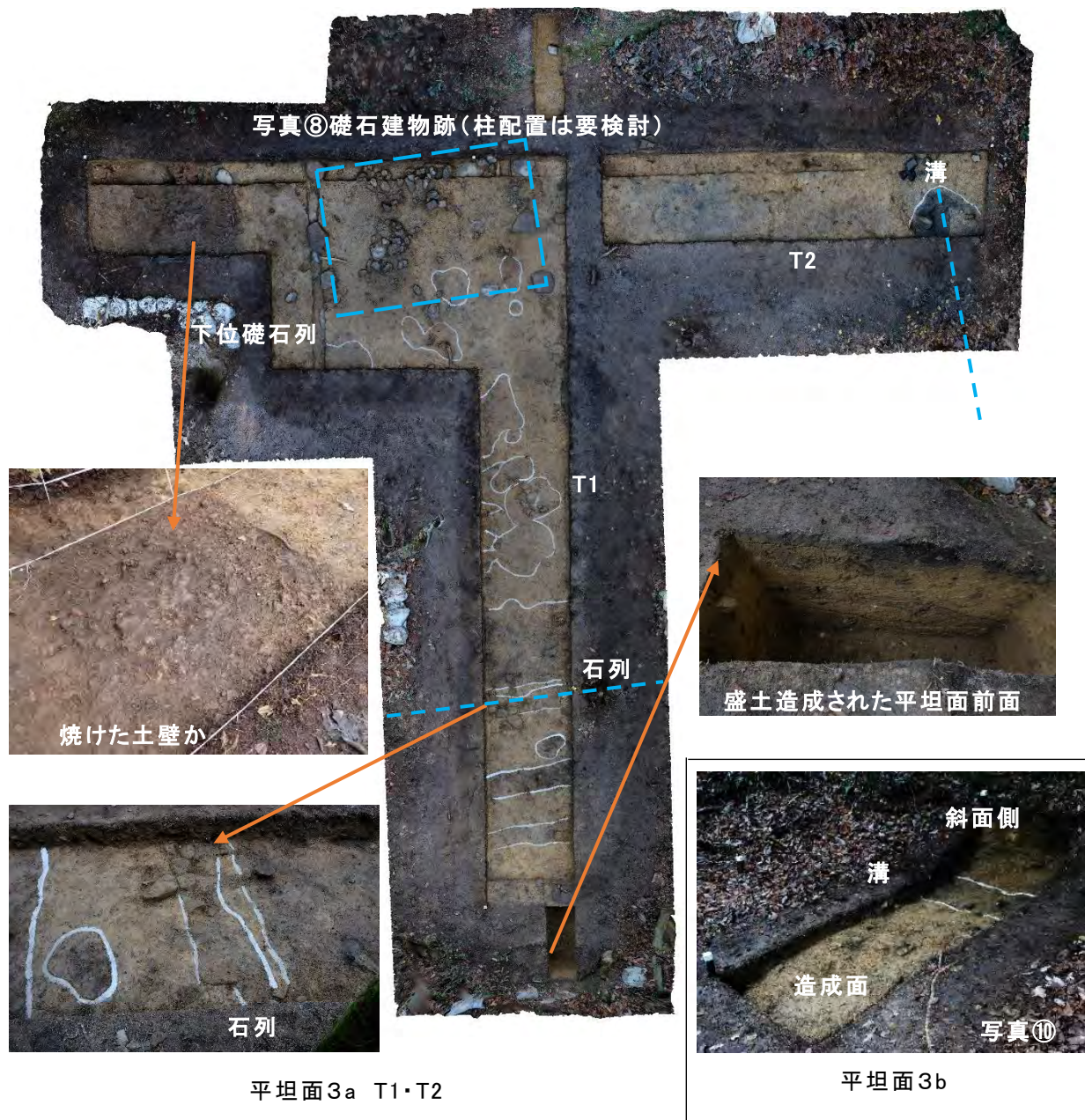
遺物は、越前焼破片、鉄釘、輸入の施釉陶器鉢、金属器などが出土しています。

平坦面3b

平坦面の造成痕跡と斜面に並行する溝(写真⑩)を確認しました。造成面には川原石や土器片が含まれており、通路の可能性もあります。

平坦面4

遺構・遺物は確認されず、建物等が存在する可能性は低いと判断される結果となりました。



4 まとめ

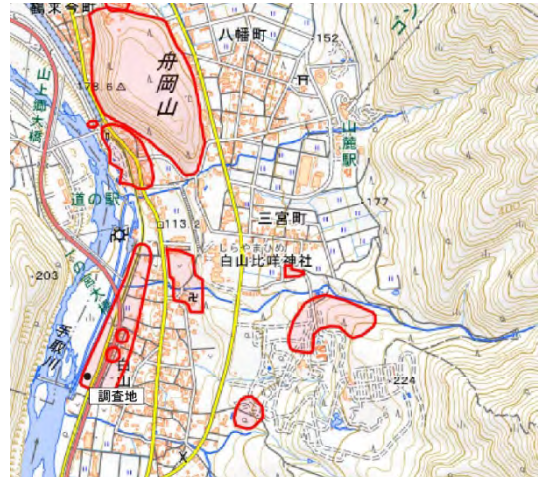
平坦面2・3で、近世以前における那谷寺の遺構が確認されました。これにより、西側尾根に展開する平坦面上において、中世那谷寺の坊や院が存在する可能性が高まったといえます。江戸時代に建てられた護摩堂や鐘楼が建つ平坦面についても、建物に対して平坦面が広いことや形状が類似していることから、中世の平坦面を利用したものと考えています。

今回の調査区については、保存目的の調査のため、これ以上の探求は行いません。広大な那谷寺境内において、古代・中世遺構の残存状況や分布の把握を主目的として調査を進めていく計画です。毎年、調査現場を公開する企画も行っておりますので、機会があればぜひご参加いただければ幸いです。

しら やま まち
白山町遺跡

白山市観光文化スポーツ部文化課
中江 隆英

所在地 白山市白山町地内
調査原因 白山頭首工視点場整備事業
調査期間 令和7年3月1日～令和7年5月1日
調査面積 830 m²
主な遺構 道路状遺構、土坑、ピット
主な遺物 縄文土器、カワラケ、珠洲焼



調査地点(1:25,000)

1 はじめに

白山町遺跡は、白山市の旧鶴来町エリアにある縄文時代と中世の遺跡です。今回の調査は、白山頭首工の視点を見るための公園づくりに伴い調査を行いました。

2 これまでの白山町遺跡調査成果

白山町遺跡は 1959 年に発見された遺跡です。発掘調査は過去に5度行われています。

調査年度	調査結果
1979	中世:墳墓を確認。五輪塔が出土した。
1980	縄文:住居や石囲炉を確認。縄文土器、石器を確認。 中世:墳墓を確認。珠洲焼や五輪塔の空風鈴等を確認。
1981	中世:石室や土坑等を確認。
1982	中世:集落跡を思わせる土坑、ピットを確認。
2012	縄文時代の土坑を確認。

3 令和7年度調査結果

今回の調査では大きく縄文時代と、中世の遺構が確認されました。

○白山町遺跡の遺構の特徴

白山町遺跡は遺跡のすぐ横に手取川が流れています。そのため、ほかの遺跡とは異なり遺構内や地山に丸みを帯びた礫が大量に入っています。

○縄文時代の遺構

縄文時代については溝が確認されたのみで遺構自身は散漫な状態でした。遺物については小片であるが確認できました。



白山町遺跡全景



白山町遺跡と手取川



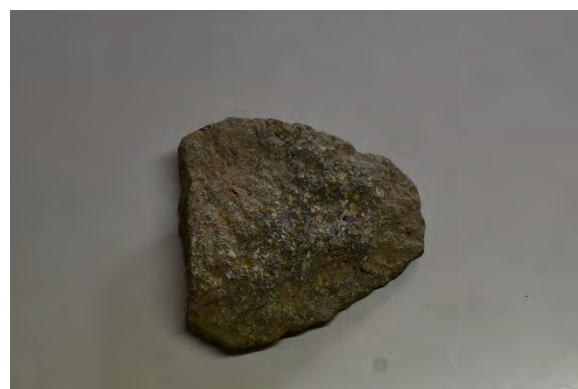
調査風景



SD70 (溝)



SD70 出土縄文土器



SD74 出土打製石器

○中世の遺構

中世の遺構としてはピットや土坑、溝などが確認された。

・道路状遺構(SD08・SD20)

幅約 1.0m、溝の深さは 0.3mで南西から北東へ直線的に伸びる2本の溝。溝の間の高い部分(道)には礫があまり混じらず、ほかの地点と異なり砂層であることから人為的に盛った可能性が高い。

○遺物について

今回の調査では、残りの良い遺物はあまり出土していないが、縄文時代後期から晩期の土器や石器と中世のカワラケや珠洲焼などの遺物が確認されています。

4まとめ

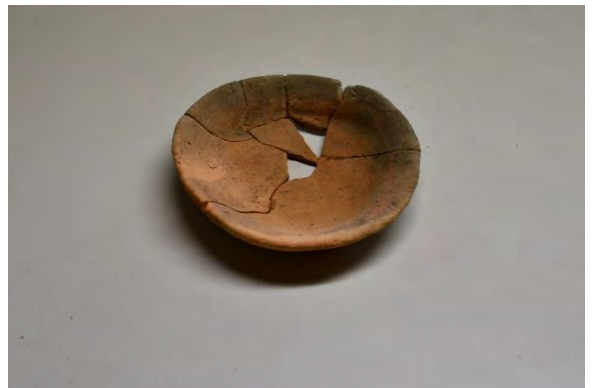
今回の調査では過去の調査で見られるような集落の跡や中世墓の確認はできなかった。しかし、中世に白山町周辺では手取川のすぐ近くに道を作り利用していたことを確認することができた。今回の成果は中世の白山町地域の集落を検討する中で重要な調査であったと考える。



道路状遺構完掘



SD08 出土珠洲焼



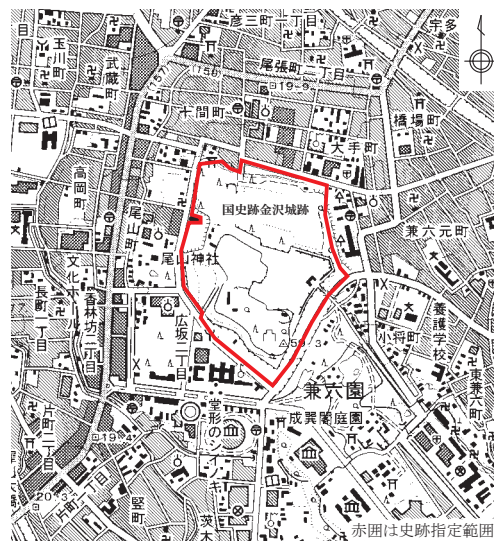
調査区東壁出土カワラケ

金沢城跡（令和6年能登半島地震災害復旧調査）

石川県金沢城調査研究所

三原 翔吾

所在地 金沢市丸の内地内
調査原因 令和6年能登半島地震災害復旧
調査期間 令和7年5月21日～12月12日
調査面積 約925㎡（8地点合計）
主な遺物 陶磁器、土師器、瓦（燾瓦、釉薬瓦）



遺跡位置図 (S=1/25,000)

1. はじめに

令和6年1月に発生した能登半島地震により城内の5地点、兼六園の2地点で石垣が崩落しました。また、崩落までに至りませんでした。石垣が変形した箇所が23地点確認されています。今年度は、被災箇所のうち、城内で6地点、兼六園で2地点の石

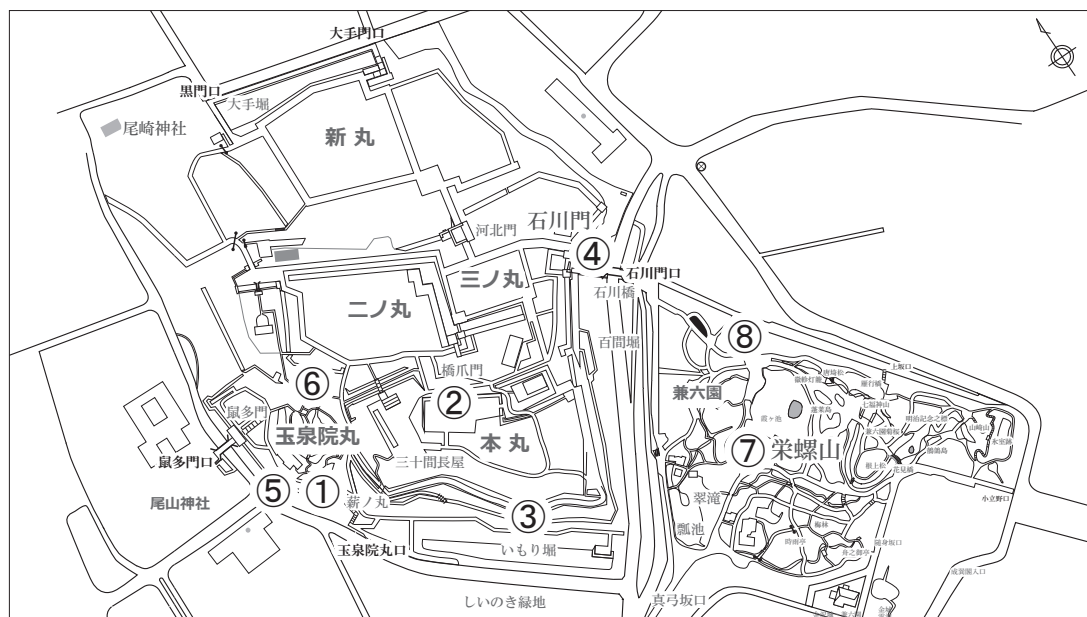
垣復旧調査を行いました（第1図・第1表）。

崩落した石垣は、以前から変形が進み、要観察となっており、また近代から現代にかけて積み直された石垣であることが特徴です。

崩落した石垣は、令和6年度から5年間で石垣の復旧を行う計画をしています。

第1表 令和7年度石垣復旧調査一覧表

No	名称	石垣名称	種類	時期	高さ(m)	被災区分
①	金沢城跡	玉泉院丸南石垣	割石積粗加工	現代	4.9	崩れ
②		本丸北石垣（煉瓦トンネル入口）	間知石積	近代創建	11.5	崩れ
③		本丸南石垣（近代階段）	間知石積	近代創建 M40	10.7	崩れ
④		石川門前土橋石垣	河原石積	近代	3.0	崩れ
⑤		玉泉院丸南西石垣	粗加工石積	近世【H19修理】	2.5	変形（前倒れ増大）
⑥		玉泉院丸北東御居間先下石垣	切石積	近世	5.9	変形（前倒れ増大）
⑦	兼六園	栄螺山石垣	河原石積	近世【H22修理】	5.0	崩れ
⑧		辰巳用水石垣	河原石積	近世	2.5	崩れ



第1図 復旧調査位置図（番号は第1表に対応）

2. 石垣復旧調査とは何をするのか

復旧調査ではまず、地震で崩落した石材を回収・整理し、原位置同定を行います。続いて上面遺構調査および地震で変形した石垣を解体することで内部構造等の確認をします。この調査内容を本格復旧の方法や工事の設計等へ活かし、元通りに石垣を積み直していきます。

以下では、今年度解体調査しました8地点の中から、令和6・7年度に実施した石川門前土橋石垣（北面）の調査について、報告します。



写真1 崩落石材の仮番付



写真2 原位置の検討



写真3 石垣上面の遺構調査



写真4 石垣へ墨打ち



写真5 築石の寸法・重さの記録



写真6 石垣の解体

3. 石川門前土橋のなりたち

金沢城と兼六園を結ぶ石川門前土橋は、平成4年から6年にかけて、県立埋蔵文化財センター（当時）により発掘調査が実施され、土橋の構造が明らかになっています。金沢城が造られる以前の16世紀中頃に土橋の原形が造られ、近世を通じて、盛土により約10m嵩上げされて分かっています。土橋の中には、縦断する木管と石管が見つかり、寛永期と天保期に設置された辰巳用水の埋設管に対応します。

明治44年には、堀が道路に整備されるとともに土橋が開削され、コンクリート製橋梁で石川橋を架け、通称「百間堀通り」が通行できるようになりました。また、平成7年に道路拡幅に伴い石川橋も付け替えられ、現在に至っています。

現状の石川門前土橋石垣（北面）は、兼六園側で高さ1.6m、石川門下で高さ約7.3mを測ります。石垣下に盛土である土羽があり、その全貌はわかりません。目視できる石垣の様相は、二相に分かれます。石川門側の築石は、粗加工調整で、大型の刻印が多くみられ、江戸時代前期（寛永年間頃）の特徴を有します。もう一つの様相は、地震で崩落した箇所も含め分布する小型の河原石や戸室石の転用材を用いる特徴があります。この河原石積みの石垣は、石積の特徴に加え、古写真や文献の記載から幕末から明治初期に積み直されたものと想定していました。

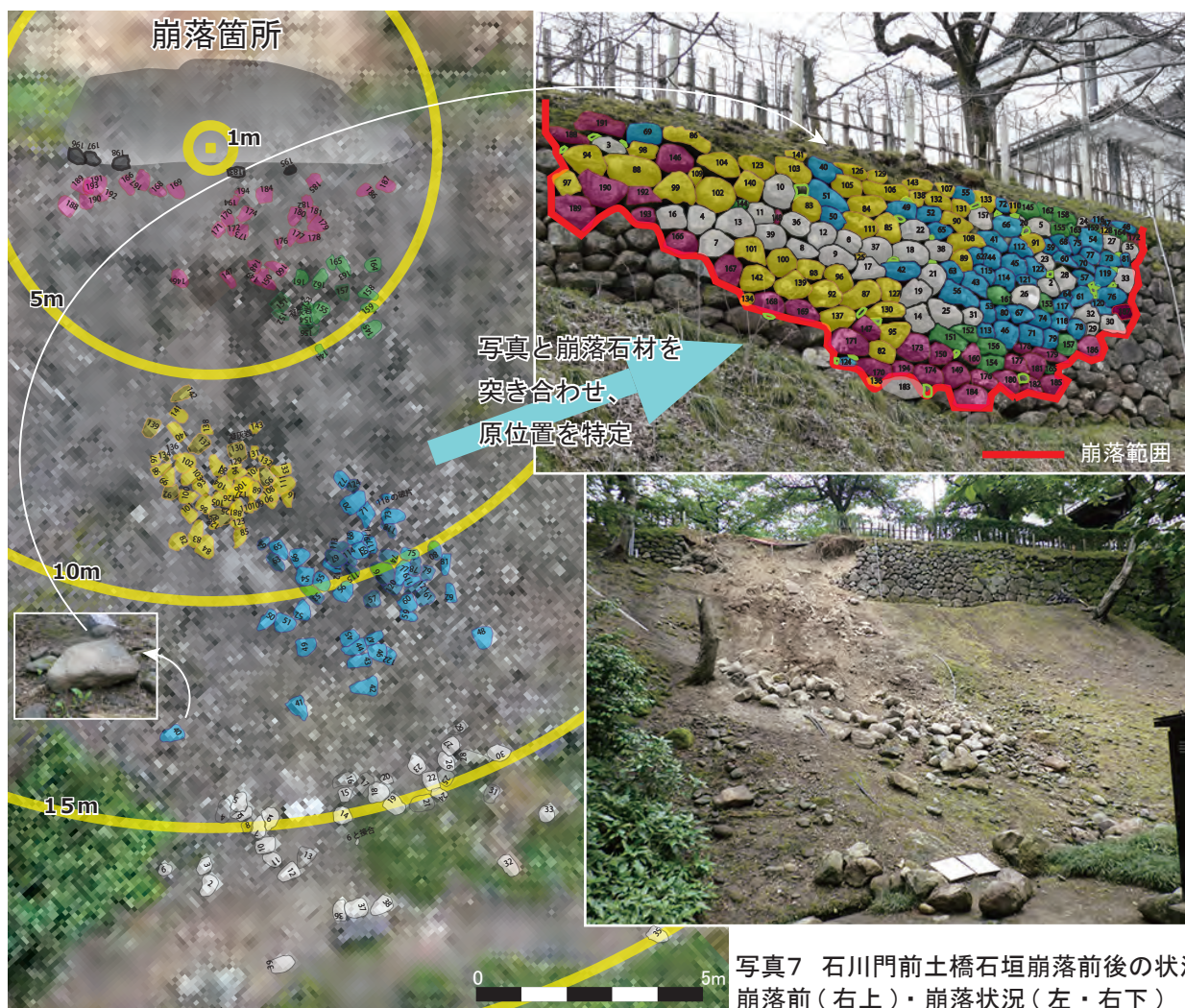
4. 調査の成果

【令和6年度の調査】

石垣の崩落箇所は高さ3m、幅8mに及び、石材は高低差約7mの石垣下斜面を転落し、20m前方まで拡散しました。令和6年度は、この崩落した石材の同定・回収作業を行いました。同定作業とは、下左図のようにすべての石材に番号をつけ（写真1）、その石が崩落前にどこにあったのかを特定していく作業です（写真2）。地震による石垣崩落前の写真が研究所に残されていたため、このような作業を実施することができ、丹念な観察によりすべての築石の原位置を確定することができました。原位置の特定は、傷ついた文化財的価値を復旧するうえで必須の作業になります。左下写真は、崩落箇所から距離に応じて、色分けした図です。15m離れていたら白色、約10mなら青色、5m以内なら緑色のよう distance に応じて区分しています。その結果、以下のことが分かりました。

- 1) 石垣立面における中段が最も遠くまで拡散していた。
- 2) 斜面上の石材（ピンク）は下段に相当。
- 3) 斜面中腹の石材（黄色）は上段と下段付近に相当。
- 4) 斜面裾（白色）は中段に相当。

このことから石垣の崩落は中段から始まり、「く」の字状に、折れるように崩落したと想定できます。



【令和7年度の調査】

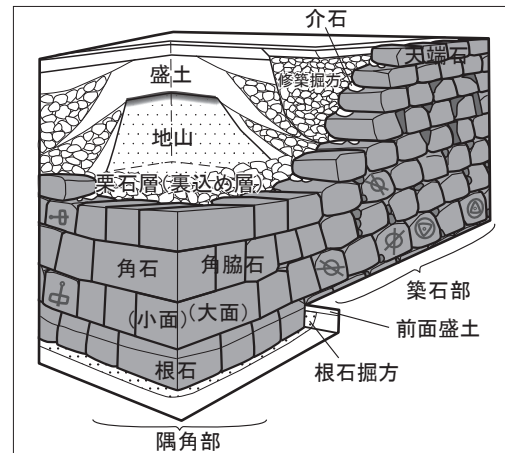
石垣は、第2図のように隅角部の角石や角脇石と連続する築石部からなっています。築石尻には、介石を挟むことで、石面の角度を調整し、石垣の勾配を決めています。石積背後には、栗石があり、その後ろの盛土や地山がこれらを支える構造となっています。栗石は、透水性や耐震性を高めるために重要な要素です。

今年度は、地震で崩落しなかったものの、崩落箇所周辺で石垣が変形した箇所について、石垣上面の遺構調査と石垣解体調査を実施しました。

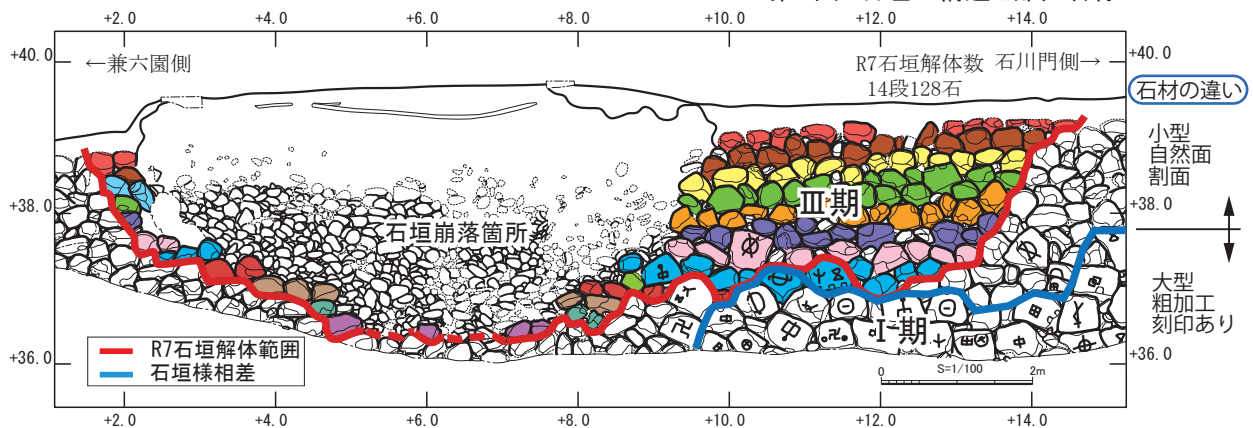
○石垣解体の方法

14段128石の築石を解体しました（第3図）。

石垣全体を写真測量した後、築石と築石や介石の接点をマーキングしながら1石ずつ写真撮影、ビデオ撮影をします。次に、配石されている角度を測りながら、石垣1段ずつ取り上げます。築石は、同じ位置に戻せるように事前に墨でグリッドを打っています（写真4）。



第2図 石垣の構造と部位名称



第3図 石川門前土橋石垣（北面）解体範囲



写真8 調査範囲全景（上空から）

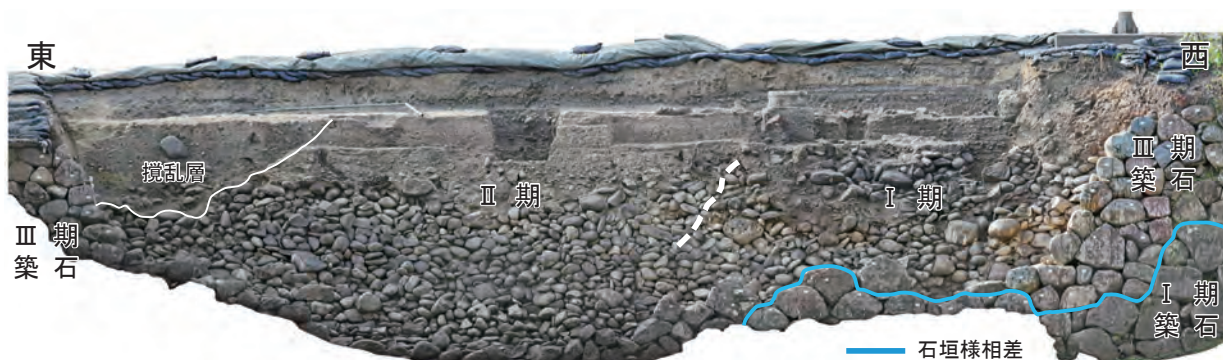


写真9 栗石層立面オルソ写真（Ⅲ期栗石撤去後）

○解体した築石と栗石の特徴

解体した築石は崩落部分と同様で、幅 30 ～ 40 cm、控え長 50 ～ 60 cmであり、小型の河原石を使用する特徴がありました。栗石は、径 20 ～ 25 cmの河原石であり、全体の奥行きは約 1.6mを測ります（写真8・10）。この栗石が詰められた掘方をⅢ期掘方と仮称します。Ⅲ期掘方の栗石を除去すると、背後にも栗石が続いていることが分かり、その様相も東側（Ⅱ期）と西側（Ⅰ期）で異にしていました（写真9）。Ⅱ期は、土をほとんど含まない総栗石層で、Ⅰ期は、栗石と土が互層状に堆積していました。このように互層状に堆積する盛土は、土橋と一体的に石積みを行った結果だと考えています。Ⅱ期掘方は、栗石の重なり方から考えると、Ⅰ期整地層より新しい時期に改修されたと想定されます。その年代は、出土遺物から 18 世紀中頃～後半を上限とします。



写真10 調査区西壁土層断面
写真右側が河原石積み石垣の裏込土



写真11 栗石上層の堆積土の大別

Ⅰ期は、最も古い石垣に伴うものであり、寛永期（17 世紀前半）の裏込土だと考えます（第3図右）。また、Ⅰ・Ⅱ期掘方を覆うように、砂質土を突き固めた路面が見つかりました（写真11）。近世の土橋天端面であり、現在より約 1 m下に位置しています。

5. おわりに

今年度の解体調査により、表面観察で確認していた2つの様相（Ⅰ・Ⅲ期）の石垣に加え、その背後にもう一つの時期（Ⅱ期）に伴う栗石層を発見しました。文献の記録と照らすと、Ⅱ期は寛政 11（1799）年の金沢地震、Ⅲ期は安政 2（1854）年の飛騨地震または同 5（1858）年の飛越地震の被害と関連する可能性があります。

6. その他復旧調査地点の紹介



石垣1段階解体後の状況 昭和40年代に体育館通路造成時に改築。石材50石を解体した。



石垣解体前の状況 大正末に旧陸軍が建設した火薬庫に至る隧道に伴う石垣34石を解体。



調査実施前の状況 旧陸軍が改築した高石垣に付加した石階段が崩落。石材回収と解体を実施した。



玉泉院丸南西石垣 石垣解体状況 平成20年の修理箇所が、大きく前倒れたため、石材151石を解体した。



調査区全景（左）・熨斗立基礎検出状況（右） 石垣解体に先行し、上面遺構調査を実施した。御居間先に所在した塚の区画である熨斗立基礎や太鼓塀控柱抜き取り痕跡などを確認した。



御居間先下石垣



石垣解体後の状況 崩落箇所周辺の変形箇所ので、石材114石を解体した。



辰巳用水石垣 石垣崩落状況 辰巳用水石管を含む約170石が崩落。石材81石を回収し、同定作業を実施。